

仙台教区 復興支援活動ニュースレター

4 → 6 ・ 4 5 通信

発行人：平賀徹夫
〒980-0014 仙台市青葉区本町 1-2-12
カトリック仙台司教区事務局
TEL 022-222-7371 FAX 022-222-7378
義援金振替口座：02260-9-2305
名義：カトリック仙台司教区本部事務局

東日本大震災被災者・復興支援のために設立されたカリタスペースのさきがけとして、2011年3月21日に開設されたカリタ塩釜ベースは、同年11月にベース活動を終了しました。その後、被災者支援として、塩釜教会と東仙台教会信徒たちの協力により、伊保石仮設住宅での「味噌づくりと分かち合い」が始まりました。その活動も、今年3月末をもって終了となり、活動報告のまとめをお書きいただきましたので、ご紹介いたします。また、福島県のカトリック須賀川教会の献堂式の模様をご紹介いたします。震災で唯一全壊した教会の再生の喜びの知らせです。最後に、熊本地震に関してお知らせを掲載しております。どうぞよろしくお願いたします。

伊保石仮設住宅集会所での味噌づくりと被災者との分かち合いを振り返って

味噌づくり代表 カトリック塩釜教会 溝田知宏
記録 カトリック東仙台教会 佐藤定雄

震災発生の年、2011年11月から塩釜市内の伊保石（いぼいし）仮設住宅集会所で味噌づくりが始まりました。塩釜教会からは、溝田、佐山、高橋、和賀、布施谷、肥田、渡辺、内山、木村、鈴木、成田、Sr.海老の延12名が参加。東仙台教会からも、佐藤、武山、男澤、岩井、松木、松本、小野寺、鈴木、瀬川、杉山が参加。また、遠く鎌倉の雪ノ下教会からは、後藤夫妻、高須、黒澤、関根、中嶋の6名が支援スタッフとして参加してくださいました。当初、月2回のペースで味噌づくりが行われましたが、2015年4月からは諸般の事情もあり、月1回に変更し、本年3月13日の最終までに60余回の味噌づくりを行うことができました。

これも全国のボランティア、各団体のお祈りやご支援のたまものと改めて感謝申し上げます。特に、味噌づくりのための材料等を提供していただきました田園調布教会の皆さまには、この書面を借りて御礼を申し上げます。

味噌づくり当初は、集会所に50人程が集まり、身動きの出来ない状況の中で味噌づくりを行いましたが、近年、塩釜市も復興住宅が建設され、徐々に仮設住宅から復興住宅へ移り住む方が多くなり、味噌づくり参加者も10人程度にまで減少してきました。

私たちスタッフは、いつも被災者の心に寄り添い、励まし合いながら、この「味噌づくり」を通して一つの大きな家族のような雰囲気醸し出し、貴重な体験を実感しました。今も被災者から寄せられたあの言葉、不安げな顔、喜んだ顔が走馬燈のように思い出されます。

(文中敬称略)



～被災者とお茶会で分かち合ったこと～

○被災者の中には、故郷が忘れがたく、地元桂島に週2回帰って、ご自分の畑で農作業(野菜作り)をしている人や、仮設集会所では様々な集いがあるが、大勢参加して皆とおしゃべりできる味噌づくりが一番楽しみという人、また仮設住宅の空きスペースのプランターを利用して畑を作って気を紛らわせる人など、時間の経過と共に、被災者の複雑な心境を感じた。表面上は元気そうに見える被災者の方も、長期にわたる仮設住宅暮らしと、先の見えない不安、特に仮設入居時期の問題など、私たちには推し量ることができない悩みがあると思うと心が痛む。

○2011年4月7日の地震後に仮設住宅に入居し、味噌づくりにも遅れて参加したので不安だったが、とても楽しかったという声を聞いたり、初めて参加された1人暮らしの方が、同じ被災者の方々に教えてもらいながら作業できたと喜んでいる姿、民間アパート借り上げ住宅に住んでいる方が、仮設集会所は遠いのでいつもは参加できないが、味噌づくりのときは送迎があるので参加できると喜んでいる姿を見ることができた。また、何度も参加されている方は、私たちよりも慣れてきて、かえって私たちの方が、教えられた感じだった。

○雪ノ下教会の後藤さんのギター伴奏で、春らしい歌を皆さんでたくさん歌った。いつも控えめなTさんの「歌に合わせた得意の踊り」が会場内を沸き立たせ、楽しく時間が過ぎていった。

○内山さんが「どじょうすくい」を表情豊かに踊られ、会場は笑いの渦に包まれた。また、被災者Aさんの替え歌「ボケない小唄」も音頭をとりながら大合唱となった。その他、青い山脈、ここに幸あり、いなかっぺ大将、こけしの歌と歌い続けた後、今月誕生の4名の方をハッピーバースデー！と歌で祝福し喜んでもらった。あちらこちらで、いつも笑い声が絶えない時間となった。

○味噌づくり後のお茶会途中、巡回中のイケメンお巡りさん2名が登場し、「オレオレ詐欺」には十分注意するよう話された。特に東北の人は優しいので何とかしてやりたいと思うようだが、くれぐれもだまされないように注意してくださいとのこと。最後に得意の歌(高校三年生・沖縄民謡)も披露し楽しい時を過ごした。

○集会所にいる間は歌をうたい、おしゃべりして楽しいが、家に帰ると独りになり、先が不安で夜眠れないという方もいた。



味噌づくりとその後のお茶会・分かち合いの様子

○復興公営住宅の参加者から、味噌づくりが楽しく、仮設住宅から出た後も引き続き参加させていただき感謝している、と言葉をかけられ、私たちスタッフもうれしく思った。

○仮設住宅を出られた方、復興公営住宅に移られた方、まだ、何の見通しもない方など、それぞれにご苦労は尽きないようで、胸が痛む。一方で、味噌づくりに参加されている時の皆さんの前向きな姿勢には、逆に勇気をもらい、お互いに励まし合っている姿に胸が熱くなった。

○今なお仮設住宅に住んでいるほとんどの方は、年金生活、生保受給者であって、家賃の高い復興公営住宅への入居は難しいとのこと。住み慣れ、寒さにも慣れた今の仮設住宅にいたい、そこに住むしかない。仮設住宅を出ると、生活の経費面など、課題が山積みのものであった。ここを動かたくないが、本音は自分の住まいが早くほしいと話す方もいた。また、これまでの5年間は仮設住宅で生活できたが、これから5年後、自分の体がどうなっているのか心配だと話される方もいた。

○復興公営住宅への入居が決まった方は、ホッとする一方、隣に誰が来るのか不安であるとのこと。まだ復興公営住宅への入居が決まっていない方は、アンケートを取られたが、希望どおりの場所へ入居ができるのか不安とのこと。また、ある復興公営住宅では、家賃が8500円で敷金が家賃の4ヶ月分、4年後には買い取ることが条件とのこと、その資金調達が心配だと話される方もいた。

○今年8月に復興公営住宅に移る方、来年に移る予定の方とそれぞれ先の見通しがついていながらも、新しい環境に慣れる不安と喜びが交差している様子であった。

○5年間も味噌づくりを続けてもらい、本当にありがたかったと感謝された。

【スタッフから一言】

◇「味噌づくり」という楽しい場があって本当に良かった!!

少しでも被災者の皆さんが日々の生活の緊張を忘れ、気分転換になったのでは、と思います。

これからも被災者の方々が一日も早く安心した生活を取り戻せますように心から祈っています。

(イエスの小さい姉妹 アスタ紀恵子)



◇当初は参加される方々の話も仮設住宅の不便さや精神的な苦痛、体調の訴えが多く、聞いているだけでもつらかったです。自分のせいや都合でこういう状況になった訳でもないのに、皆さん前向きに味噌づくりに参加し、歌ったりおしゃべりしたりして、帰るときは笑顔になっている姿を目の前にして本当にすごいと思いました。

5年経過し、ようやく復興公営住宅に入る見通しが立ち、新しい住居や生活に期待されている様子を聞き、良かったと思いました。皆さまが早く新しい環境に慣れ、楽しい生活を過ごされることができるようお祈りを続けたいと思います。味噌づくりと分かち合いに参加させていただき、ありがとうございました。(東仙台教会 男澤和子)

献堂式 須賀川教会、再生の喜び

仙台教区サポートセンター 長谷川昌子

4月17日(日)午前11時から、カトリック須賀川教会で献堂式が行われました。

須賀川教会は、仙台教区内で、2011年3月11日の大震災で全壊した唯一の教会でした。須賀川教会の信者さんたちは、献堂式の喜びで、震災後、教会に駆けつけた当時のことを思い出して、「惨状のあまりの有様に言葉を失い、ただ呆然とするばかりでした」「さらに、自分たちの教会がなくなった！という衝撃とともに、壊れた聖堂内の数々の聖品を片づける心の痛みがありましたね」「でもね、あの聖堂の十字架は、修復されて掲げられているもので、以前と同じものです」と、聖堂入り口で話してくださいました。

そのうちに、震災同時から、須賀川教会を支援してくださっている東京教区の西千葉教会、茂原教会、田園調布教会の信者さんたちが到着し、福島県内の各教会の信徒会長さんたちも揃い、献堂式のミサが始まりました。

献堂式のミサは、平賀徹夫司教様が主司式、須賀川教会担当のエミール・エテメ神父様(ケベック外国宣教会)、須賀川教会が所属している第8地区責任司祭の板垣勤神父様、グアダルペ宣教会のマルチネス・バエス・イグナシオ神父様の共同司式でささげられました。



祭壇を聖香油で祝別する平賀司教様(上)
須賀川教会の聖堂(右)



説教の中で、平賀司教は、次のように話されました。

「わたしの家は、すべての民の祈りの家と呼ばれる」というイザヤ書56・7を引用し、「今日、ここに集まった人々は、本当にこの聖書の言葉のしるしとなっています。フィリピンから来てここに住んでいる方、千葉から来られた方、須賀川の方、さらに、これからこちらの教会に来て集まる人々、東南アジアからも来られるでしょう、いろいろな方がここに集まり神の民として、礼拝し、感謝をささげ、神をたたえ、生きる力を味わい、神からの恵みを汲んで、神のいつくしみを表していくしるしとなる場、それが教会です」。

「4月14日、突然、熊本市が地震に見舞われました。5年前、私たちも同じように自然災害を受けました。教会、司祭館を取り壊し、このように再生することができました。この再生の日を迎えることができるように、世界各地から、日本中から助けていただきました。お互いに助け合う交わりを作っていく場、それが教会です。実際に集う人はわずかでも、すべての人を包み込んで、神にささげる使命があります」と。

この聖堂には、2体のマリア像が祭壇を中心に、左右に置かれています。1体は、ルルドのマリア像です。この教会の歴史とともに60年の間、修復を重ね、大切にされているもの。そしてもう1体は、ファティマのマリア像。フィリピンから持ち帰ってきた大切なマリア像です。この2体のマリア像は、共に1つの共同体をつくるシンボルとして安置されているものです。



ファチマのマリア様



ルルドのマリア様



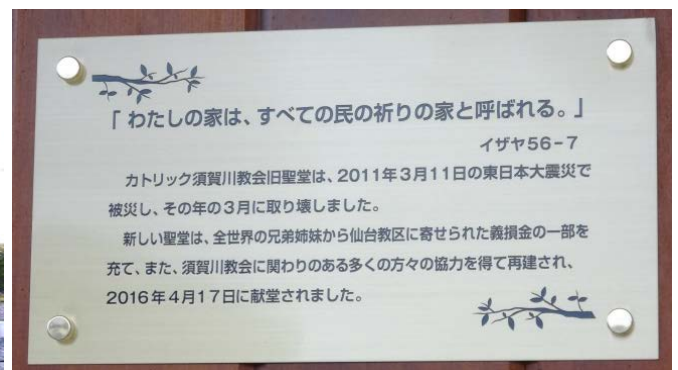
この日、通常は30人がゆったり祈れる須賀川教会の小さい新聖堂が、悲しみから立ち上がり献堂式を迎えた80余人の喜びあふれる笑顔の参列者でいっぱいでした。

当日は大風が吹き荒れ、ミサ中に、祝賀会のために建てられていたテントが風によって倒され、祝賀会は急遽、聖堂の中に変更されました。

祝賀会の挨拶のなかで平賀司教様が「この教会が全壊し、今後どうしようかと信者の皆様のご意見を伺ったとき、日本人の方々は、『新しい教会が出来たとしても、私たちは高齢ですから、今後、いつまでこの教会を維持することができるかわかりません。私たちはあきらめます』ということでした。しかし、ここにも大勢のフィリピンの方々がいらっしゃいますが、この方々が『私たちは祈る場所がほしいのです。私たちの教会を建ててください』と言われたのです。この方々の願い、祈り、熱い思いがなければ、今日の日を迎えられなかったことでしょう」と披露してくださいました。



カトリック須賀川教会 全景



祝賀会のお料理も、フィリピンの方々が作ってくださったフィリピン料理がたくさん並べられ、参列者を喜ばせていました。

特別に、この日を感慨深く迎えたのは、マルティネス神父様でした。「グアダルペ宣教会が来日し、最初に本部を置いたのが、ここ須賀川でした。ここで私は神学生時代を過ごし、司祭になってからは、須賀川教会の主任司祭として住んでいたこともありますよ」と、東京から駆けつけて来た理由を話されました。

教会委員長・先崎カヤノさんが、「献堂式を迎えることができるなんて夢のようです。これからも、みんなで力を合わせて、この新しい教会が、『すべての民の祈りの家』となるように努めていきます」と決意を込めて語る姿に、須賀川教会の将来が見えるようでした。



献堂式に参加された皆さんで記念撮影

※掲載写真は、カトリック須賀川教会からご提供いただきました。

熊本地震 カリタス福岡・熊本センター設置及びボランティア募集のお知らせ

カトリック福岡司教区は、カリタスジャパンの支援を受け、平成28年熊本地震被災地域の復興支援活動のため、5月9日、カリタス福岡・熊本センター（くまセン）を設置しました。支援対象は教会や信徒に限定せず、社会全体を対象としています。

現在、くまセンでは、ボランティアを募集しております。募集要項やお申し込み方法などの詳細は、インターネット <http://fukuoka.catholic.jp/ejsien.html> をご覧ください。

《カリタス福岡・熊本支援センター（くまセン）》

〒861-1331 熊本県菊池市大字隈府 278-2 カトリック菊池教会内

〈ボランティア受付〉

TEL：080-2709-0237（お問い合わせは8時～19時までをお願いします）

FAX：0968-24-8209

E-mail：kumasen.vol@gmail.com

〈お問い合わせ窓口〉

- ・カリタス福岡・熊本支援センター（くまセン）に関するお問い合わせ

080-2703-0266（お問い合わせは8時～19時までをお願いします）

- ・物資支援に関するお問い合わせ

080-1761-4150（カトリック福岡教区 熊本地震被災者支援室）